

巻頭言

2025年以降を見据えて



徳島大学薬学部長

佐野茂樹

Shigeki Sano

最近「2025年問題」という言葉を耳にする機会が増えてきました。2025年には、約800万人の団塊

の世代が75歳以上となり、全人口の5.6人に1人が後期高齢者という時代が到来することから、国民の医療や介護の大幅な需要増加が見込まれています。そこで、厚生労働省は2025年を目途に、高齢者が住み慣れた地域で自分らしい人生を全うできる社会の実現をめざして、地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の整備を進めています。オックスフォード大学のマイケル・A・オズボーン准教授は、2014年に発表した論文『雇用の未来－コンピュータ化によって仕事は失われるのか』の中で、米国の702の職種の約半数が10～20年後には人工知能（AI）やロボットに取って代わられると予測しま

した。ちなみに、2025年以降も生き残る可能性の高い順に職種を並べると、1位に Recreational Therapists、54位に Pharmacists（薬剤師）、562位に Pharmacy Technicians（調剤技師）、最下位に Telemarketers がランクされています。このような状況のもと、薬学部での人材養成のあり方が厳しく問われる中で、徳島大学薬学部では両学科一括での募集を学科別募集へと変更し、薬学系人材養成への新たな挑戦が始まっています。2025年以降をしっかりと見据え、既存の枠組みにとらわれない柔軟な発想をもって、みなさんと共に時代の変化に応じた確かな方向性を見出したいと願っています。

4年制課程新カリキュラムについて



薬学部教務委員会委員長
生薬学分野 教授

柏田良樹

Yoshiki Kashiwada

徳島大学薬学部では6年制の薬学科においては先導的薬剤師の養成、4年制の創製薬科学科では創薬・

薬学研究者の養成を目指した教育を行っていますが、平成30年度入試からはそれぞれの学科ごとに学生を募集することになりました（詳しくは薬学部だより vol. 20をご覧ください）。この入学者選抜方式の変更に伴い、それぞれの学科のディプロマポリシーに対応した特色あるカリキュラム策定のため、有機系、物理系、生物系、医療系教員から構成されるワーキンググループが設置され、昨年度より議論が行われてきました。平成30年度入学生からのカリキュラムでは、現行の授業科目における重複等を見直し・整理するとともに、60分授業を90分に変更し、創製薬科学科のための新しい教科目、演習等が加えられたものになりました。創製薬科学科学生はこれまでと

同様な薬学科学科生と共通の授業、実習等とともに、新設の授業、演習等を履修します。1年次前期には外国人教員が英語で授業を行う「薬学英語実践講座」や、「研究体験演習Ⅰ」で学習した内容を英語で論文作成を行う「学術論文作成法」、また、学生が各研究室で3～5回程度の実験を行う「薬学体験演習Ⅱ」等が設けられるなど、低学年から研究やグローバル教育にさらに重点がおかれた新しい教科目、演習等が盛り込まれています。本カリキュラムにより創製薬科学科においては、創薬・薬学研究分野でこれまで以上にグローバルに活躍できる人材の輩出につながるものと期待しています。